

## 沖縄と私

今一度私の住むこの日本という国を私自身の日と足を使って見つめ直してみよう、と仕事の合間を見つけては、日本のあちらこちらを訪ねて歩いてきた。それはささやかな「私自身」への問いかけであり、私の中にあった世界像の修正作業のはじまりでもあった。

私にとって沖縄は、現在の国という単位で見ると同郷であり、過去の歴史的側面や文化的側面を見れば異郷ともいえる。そしてこの多重性ゆえに、沖縄という地が、私自身と日本の今という時と長い長い過去とをつなぐくびきのように思え、繰り返し沖縄を訪れる契機となった。

\* \* \*

アメリカから派遣されたペリーら一行が、江戸に開国を迫るため、浦賀の洋上に現れたのは今からおよそ150年前の1853年7月。この出来事を境に、日本は西洋で生まれた近代国家という制度に向かって大きく傾斜していくのだが、ペリーらが江戸に向かう直前に立ち寄っていたのは、上海から江戸へ至る途上であり、補給地として好都合な沖縄（琉球）であった。

それから約90年後。沖縄、朝鮮、やがて東南アジア諸国を強引に取り込みつつ、急速に近代国家化していった日本を打ち砕いたのもまた、かつてペリーらを派遣した国、アメリカであった。米軍が日本本土に上陸するための足場とするべく、大量の兵力を注ぎ込んで攻撃した地が沖縄であったという事実は、地政学的という言葉で片付けるにはあまりにも完璧な歴史的符合に思える。

ある時、先の沖縄戦最後の激戦地である喜屋武半島南部の、喜屋武岬から摩文仁の断崖にいたる海岸線を歩いた。そこは珊瑚によって形作られた、複雑な地形の続く海岸であった。

1945年5月。やがて米軍の圧倒的な軍事力を前に、日本軍は、本土決戦へ向けた時間稼ぎのため、沖縄本島南部への撤退による持久戦を目論んだ。しかし、南部地域にはすでに多くの民間人が避難しており、軍のこの決定は、この地域が、民間人と軍人の区別のない凄惨な戦場と化すことを意味していた。沖縄本島の最南端に位置する喜屋武岬から摩文仁の断崖にいたる海岸に人々がたどり着いた時、もはや後にも先にも逃げるべき場所はなかった。

\* \* \*

ニライカナイの神話の昔、人類が生まれるずっと昔に、この島は生まれた。長い長い、途方もない時間の中で、潮が満ち引きを繰り返し、太陽の光が波間に輝き、月が浜辺を照らし出してきたことだろう。

今、私の目の前には、沖縄を取り巻く強者と弱者の論理が絡まりあった複雑な歴史の堆積する海岸線が、遙かに延びている。

足元では、沖合で細かく砕け散った波の名残が、しずかに、寄せてはかえす。

2007年12月

圓井義典